

吉例霜月顔よせ興行
 人秋澤播瑠



波のつ橋時

文楽座

乍憚口上

豊穰の秋を迎へ國內皆々様には一層御緊張の御事と存上候借而當座は引續き非常の御聲援を賜り連日盛況を致居候段篤く御禮申上候就ては此度は例年の如く顔よせ興行と仕り座員一同には愈々藝術報國の本來の使命に従ひ當座獨得の古典の妙味を發揮いたす可く殊さら數十年ぶりに上演致す狂言を始め豪華艷麗なる狂言をおもしろく配置いたし持役各々大車輪の熱演を以て御目見得致す可き筈にて此際特に時局に適應して無駄を省き虚飾を捨て唯々御客様本位に相勤め可申候間何卒いづくに變らせられず陸續御來觀の榮を賜り度偏に御願奉申上候

昭和十六年十一月一日

四ツ橋畔

文 樂 座 告白

昭和十六年十一月一日初日

初日午後二時半開演
毎日午後三時開演

・御觀覽料・

- 一等席 御一名 金三圓五十錢
(二階座席三十錢上り)
- 二等席 御一名 金一圓五十錢
- 三等席 御一名 金六 十 錢
(各等入場税別)

一等御座席
一等椅子席 } は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 專用電話 南⁷⁵四七壹番
一般御用 電話 南⁷⁵三〇三番
南⁷⁵三七八番

お草履の準備は御座ひますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ひます。

公奉域職 · 踐實道臣



國民精神總動員

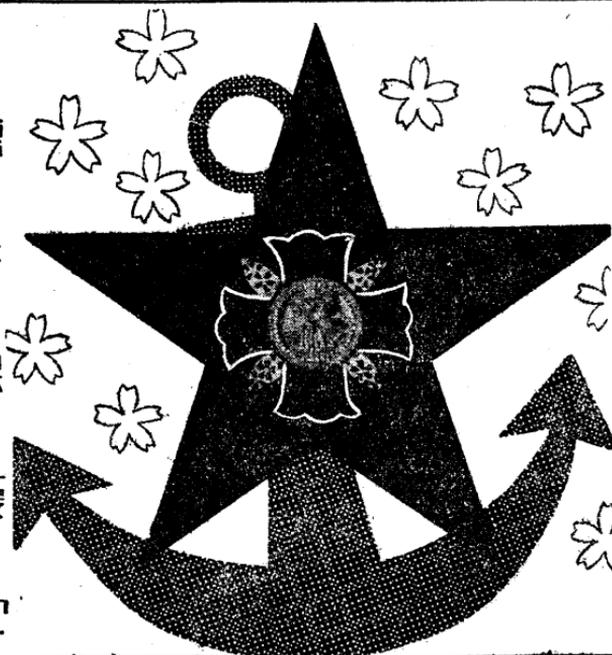


盡忠報國

舉國一致

堅忍持久

國を護つた傷兵護れ



傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟

霜月顔よ興行

演出總形人・線味三・夫太

演開 半時二後午 日初
演開 時三後午 日每 日初日一月一十

| 第六 | 第五 | 第四 | 第三 | 第二 | 第一 |
|----|----|----|----|----|----|
| 壺 | 新 | 日 | 義 | 傾 | 糸 |
| 坂 | 曲 | 本 | 士 | 城 | 仙 |
| 觀 | 紅 | 賢 | 銘 | 阿 | 人 |
| 靈 | 葉 | 女 | 々 | 波 | 吉 |
| 驗 | 狩 | 鑑 | 傳 | の | 野 |
| 記 | 幕 | 段 | 段 | 鳴 | 山 |
| | | | | の | 花 |
| | | | | 戸 | 王 |

壺
坂
觀
靈
驗
記

紅
葉
狩
幕

賢
女
鑑

銘
々
傳

阿
波
の
鳴
戸

吉
野
山
花
王

糸
仙
人
吉
野
山
花
王



くめの せん じん よしの の さくら
衆 仙 人 吉 野 花 王

吉 野 山 の 段

吉 野 山 の 段

衆 王 (豊) 竹 竹 和 泉 太 夫
呂 太 夫

花 増 竹 本 七 五 三 太 夫

大 伴 坊 (豊) 竹 本 長 尾 太 夫
伊 勢 太 夫

安 曇 坊 (豊) 竹 本 千 駒 太 夫
さ の 太 夫

ツレ (豊) 竹 本 隅 若 太 夫
松 島 太 夫

竹 本 三 瀧 太 夫

これは寛保三年八月(二四〇三)豊竹座上演の爲永太郎兵衛作「久米仙人吉野櫻」全五段の中、その第五段目に當るもので、衆王子が仙術を以て神寶を奪ひ、龍神龍女を岩窟へ封じこめて王位を得んと企んでゐたが美女人増の美しさに心を迷はせてその通力を失ふと云ふ一場で寛保二年二月市川海老藏等が大坂佐渡島長五郎座で演じた「雷神不動北山櫻」鳴神上人墮落の場の作意をそのままに取り入れたものと云はれてゐる。

梗 概

衆仙人は大伴坊、安曇坊の弟子僧二人を従へ、秘法を修めて呪術を行ひ人跡未踏の深山の岩屋に龍神龍女を封じこめ、爲めに雨一滴も降らず人々は困つてゐた。

或日、都から花増と呼ぶ絶世の美女がこの戒壇



ては花増の尋ぬるまゝに、問はれるまゝに呪術の秘法まで打明けて、其場に寝てしまつて正體もない。

好機は今と、花増は壇に張り廻らされた注連繩を切り拂つた。と、忽ち豪雨沛然として降つて来る。

秘法は斯うして破れた。

(佐和利) 吉野山の段

アイそんならお二人様も聞て下さんせ、恥かしながら過行れし殿御は武士の浪人、わたしはもと江口の里の傾城、二世も三世もかはらじと言ひかはした其初戀は十とせ以前の彌生の空、住吉の汐干に参つたとおもはしやんせ、岸の向ひの淡路島山を見はらせば沖で貝を拾ふやら松のしげみに爰かしと幕打廻して琴の爪音、鼓の調べ禿まじくりに磯邊傳ひに歩行たりや向ふの幕の外面に廿餘りの殿御が立て居さんした、其風俗の可愛らしき互に顔をじつと見合したが戀の病つき、見とるゝ間に幕の内へつい這入んしたと思ふたりや薄紅梅の短冊に歌をかい

を眞逆様。

禿を呼かへしておこさんしたと思はんせ、ヲ、それから先が思ひやるゝ、ちやつと後が聞き度いと二人はうっかり有頂天、ヲ、せはし其短冊に書れしは古歌ながら筆はこびのうつくしき、初花の露の情のいさゝめに、ハアとんと下の句を忘れた程にのア、しんき初花の露の情のいさゝめに醉なすめ春の山風といふ下の句ではなかりしかと王子も御心ときめけば、ア、御出家様にはしほらしいよふ御存じ、してゝどうじや、それから廓へ戻つても所もしれず名もしらぬ殿御を戀に三味線のいとらしい其歌に、さめといふ節付てはつ花の露のなさけのいさゝめに明暮、諷へばいつとなく傳授秘傳といさゝめの歌は世上にかくれなく、殿御もそれを聞傳へ尋ねて見へた其時の嬉しさはいんまにわしや忘れぬ、サア、うまふやつて來たシテ、それから、なびむに隨ひ其面白さ可愛らしさある時はあげやの中二階戯れこぶじて口舌となり覺へもない事無理ばつかり抓るぞへ擲くぞへと殿御のつむりをびつしやゝもふ逝る、いやいなす事はならぬゝと取つく嶋の羽織の袖口ベリ、それが、それが其夜の口舌の仕まい、月も入るゝ夜明の廓、かはいゝとたぎしめて、と咄しの中より王子はうつとり禮上

花益嬉しく、ム、すりや其神寶はあの宮の内納つてあるかへ、そふしてマア春でもないのに今をさかりのアノ櫻の花はへ、ふしぎなは道理あれは吉野の山櫻爰へ取寄せ時ならぬ花を咲すも我行力、麓へさがりし後にて、もし太子方の者共が神寶を心がけよち上らんとする時は忽櫻がとび散て花物いはねど告しらす、何ときつい要害か眞になア、それ程自由な事ならば今でも雨を降そふと儘かへ、ヲ、あのはうたる注連を切拂へば龍神飛去り雨を降らすといふ中もふらゝ眠ればサア呑んせ、迷惑ながら君の仰は背かれまい、サア祝ふて三献これや赦せ胸愈じやといひつゝころりと正体なし、コレゝ起さんせ、是なアと起して見てそつと退きア、勿体なや恐ろしや糸の王子様お赦されて下さりませ、私が心からお前を落しはせねど王様の勅諭萬民の爲じやによつて色と酒とにお心を迷はしまして、淺ましい体になりました此罪は何とかなるとしはばし涙にくれけるが、ア、思へば王への忠義じや物、御出家落して報ひや罪は此身一つにとどまつて地獄へ落ても大事な。

傾城阿波の鳴戸

順禮歌の段



順禮歌の段

切竹本重太夫

豊澤廣助

人形役割

女房お弓 桐竹紋十郎

娘おつる 桐竹紋司

大近松の「夕霧阿波鳴戸」を雛案して、近松半二、竹本三郎兵衛、八民平七、竹田文吉、吉田兵藏等の合作になる「傾城阿波の鳴戸」は全十段よりなり、明和五年六月一日（二四二八）から竹本座に上場された。その第八段目がこの順禮歌の段（十部兵衛内の段）で、こゝではその内、順禮おつるとお弓との奇しき出會ひと生別離の件りを一齣として上演する。尙、大體の趣向は阿波徳島玉木家のお家騒動と云ふ事になつてゐて、忠義の家老櫻井主膳は悪人小野田郡兵衛の爲め主家の寶刀を盗まれるが、舊臣十郎兵衛お弓の夫婦及び藤屋伊左衛門等の苦心の末再び名刀を取り返へし主家を安泰にすると云ふ筋である。

梗概

阿波徳島玉木家の若殿衛門助は、吉原の傾城高尾太夫に溺れてゐたが、これに乗じて主家横領を



企む悪家老小野田郡兵衛は、野望を遂げるに邪魔な家老櫻井主膳を退ける爲、主膳が預る主家の重寶、國次の銘刀をひそかに盗み出して、首尾よく主膳を退けて了つた。

と、茲に、主膳の舊臣で十郎兵衛、お弓と云ふ夫婦がゐるが、現在は主人の刀詮議の爲に、心にもなく盜賊の群に入つて、十郎兵衛はその名も銀十郎と變へ、大阪玉造のほとりに住んでゐた。

或る日のこと、銀十郎の女房お弓は、憐れな順禮歌を口にして來る、いたいけな小娘に出會つたが、故郷に同じ年頃の娘を残して來たお弓は、自然と此の娘に心を引かされていつた。お弓はいくらかの報謝をした後、どうした譯の一人旅かたたづねると、その娘の口からもらされたのは、

「國は阿波の徳島で、父様の名は十郎兵衛、又母様の名はお弓、其父母に逢ひたさ故に、わし一人西國するのでござります……」

と、云ふのであつた。瞬間お弓は胸のつぶれる

思ひがした。それも道理である。此のいぢらしい
順禮こそ、吾が生みの子おつるなのだ。

お弓は可愛さ懷さで、力いつばい抱きしめたい
のだつたが、今の夫婦は世をせまく生きる身で、
躰ては悲しい死を遂げる體である。なまぢ名乗つ
て憂目を見せるよりはと、ちつと堪へ難きを堪へ
忍んで、吾が身の憐れを他事に、沁々と云ひきか
せたり、諭したりするのであつた。

おつるも能く聞きわけたが、母なき身の心細さ
や、一人旅の悲しさ辛さを語るので、お弓の胸は
かきむしられるやう。いつそ、と名乗りかけたが
又思ひ返して、何れ父母揃ふて逢ひに行かふは定
旅で病んだら悲しかる程に、祖母様の所へ戻つた
がよいと、僞つて歸すのだつた。おつるにも、何
とはなく此の人が母の様に思はれたが、振り返り
／＼此所を去つて行つた。

お弓は遠ざかり行く後ろ姿を、延上り／＼見送
つてゐたが、いまはモウ堪まらなくなつて、夢中

にその後を追ふのだつた。

(佐和利) 順禮歌の段

誓は重き觀世音、普陀落や、岸打なみは、三熊野の、
那智のお山にひびく龍津瀨、年はやう／＼とうどのの、
道をかけたる笈摺に、同行二人とするせしは、一人は大
悲のかけ頼む、ふるさとを、はるばるこゝに紀三井寺、
順禮に御報謝と、いふも優しき國訛、テモしほらしい順
禮衆、ドレ／＼報謝しんぜうと、盆に白米の志し、アイ
／＼有がたう御ざりますと、いふ物腰から棲はづれ、可
愛らしい娘の子、定めて連衆は御親達、國はいづくと尋
ねられ、アイ國は阿波の徳島でござります、ム、何じや
徳島、さつてもそれは、マアなつかしいわしが生れも阿
波の徳島、そして父様や母様と一所に順禮さんすのか、
イエ、／＼其父様や母様に逢ひたき故、それでわし一人西
國するのでござりますと、聞いてどうやら氣にかゝる、
お弓は猶も傍に寄り、ム、父様や母様に逢ひたきに西國
するとは、どうした譯ぢや、それが聞たい、マア其親達
の名は何といふぞいの、アイどうした譯ぢや知らぬが、
三つの年に父様も母様も、わしを婆様に預けて、どこへ

やらいかしやんしたげな、それでわたしは婆様の世話になつてゐたけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見たい、それで方々尋ねてあるくのでござります、父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申しますと、聞いて喫驚りお弓は取付き、コレコレアノ父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れて、ばゝ様に育てられてゐたとは、疑ひもない我娘と、見れば見る程稚顔、見覚えのある額の黒子、ヤレ我子かなつかしやといはんとせしが

コレ、何ぼ一人旅でも、たとと錢さへやりや泊める、わづかなれども志し、此銀を路銀にして、早う國へ去にや必ず〜煩ふてばしたもんなど、銀を渡せば押戻し、嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物を、たとと持つております、そんなりやまうさんじます、忝うござりますと、泣々立つを引とゞめ、それはそうでも是はわしが志と、無理に持たして塵打拂ひ、これもう去にやるか、名残が惜い別れとむない、これ今一度顔をと引寄せて、見れば見る程胸せまり、離れがたなき憂思ひ、それと知らねど誠の血筋、名残惜げに振返り、どこをどうして尋

ねたら、父様や母様に、あはれることぞ、逢はしてたべ南無大悲の觀音様。父母の、惠も深き粉川寺。泣々別れ行く跡を、見送り〜延び上り、これ娘、ま一度こちら向いてたも、折角長の海山越え、艱難してあこがれ尋ねるいとし子に、不思議と逢ひはあひながら、名乗らで退す母が氣は、どの様に有らうと思ふ、狂氣半分半分は死んでゐるはいの、まだ長生の有る子をば、親故路頭に立すかと、其儘そこにどうと伏し、消え入る許り歎きしが起直つて涙を押へ。イヤ〜どう思ひ諦めても、今別れては又逢ふことはならぬ身の上、譬へ難儀がかゝらばかゝれ、又其時は夫の思案、程は行くまい追付いて、つれて戻らう、さうじゃ〜と子に迷ふ、道は親子のわかれ道、跡をしたうて。

義士銘々傳

彌作鎌腹の段



彌作鎌腹の段

赤穂義士の一人萱野和助に絡る哀話を主題とした「彌作鎌腹」の段はその作者もその初演年代も不詳である。

例へば徳島縣教育會發行の「義太夫調査書」では作者年代共に未詳とあり、「邦樂年表」にも載せられてゐない然し其日庵の「淨瑠璃素人講釋」の「忠臣義士傳彌作鎌腹の段」の項に、此段は嘉永の頃倉田千兩と云ふ人（「義士銘々傳」赤垣出立の段の作者とも云はれる人）が素人の名人十三の爲めに書き與へ、それを三味線彈の龜之助が節付けしたとあり、「歌舞伎細見」には寛政三年九月

（二四五）大阪角座上演の奈河七五三助作「いろは假名四十七訓」の六つ目が彌作の鎌腹であるとあり、恐らく歌舞伎から淨瑠璃に轉じた作品であらう。

人形役

割鶴

前切
豐鶴 豐鶴 竹澤 竹澤 和泉 竹澤 和泉 竹澤 和泉
仙呂 太 糸夫 叶夫 太夫 太夫 太夫

| | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|-------|---|
| 奴代大狸萱女百 | 官星の野房姓 | 七由角野お彌 | 太良兵和か | 夫助衛助や | 作 |
| 吉吉桐吉吉吉吉 | 田田竹田田田田 | 兵玉門玉文兵榮 | 次藏造徳作吉三 | | |

梗概

赤穂浪士の一人萱野和助の兄彌作は、強慾の代官七太夫と約して、弟和助を印南と云ふ豪家の養



子にしようとしたが、弟は大望のある身だと承知しなかつた。

彌作は詮方思案に暮れ果てた。折柄七太夫が入り來つて約束なればと和助を連れて行かうと云ふ彌作は事をわけて約束を破談しようとする種々辯疎したが、七太夫は印南家より百兩の周旋料を取つて居るので承引せず、果ては武士が立たぬ切腹せんなどと無理を言ひ掛ける。

彌作は元來の正直者、弟に他言はせぬと誓ひ乍らも、せめて之れを言ひ立てれば七太夫も聽き容れて呉れようと、淺果かにも故主の仇吉良を討たうとする赤穂浪士四十餘人の其の一人に弟も加はつてゐるので、養子縁組は無益なりと、つひ弟の大望を口外してしまつた。

だが、七太夫は尙更承知せず、今夕暮六つの鐘までに再度和助を説いて呉れと歸へつて行つた。

引き違ひに和助が歸へつて來た。

彌作は事の始終を和助に物語つた。

驚いた和助が、一大事知つた七太夫、住家へ駆け込み只一打ちとあせるのを引き留め、大事は明しはしなかつた。たゞお前の志を確め様と一寸言つてみたゞけだと言ひ紛らした。

折柄暮れ六つの鐘。弟は暇乞して出發した。

程なく又七太夫襷鉢巻の扮装で出て來り、和助を渡せと罵る。彌作斷りの印にと和助より預つた五兩の金を出す。七太夫は怒つて先刻聞き知つた大望を訴人して賞金にありつかうと駈け出した。

彌作、もう此上は絶對絶命と鐵砲を取り出して、驅け行く七太夫を只一發に仕留め、己れも代官殺した上は生きても居られぬ、切腹しようとして山刀を抜き放ち腹へ當てたが百姓の悲しさ、氣後れがしてどうも刃が腹に立たぬ。百姓には似合ひの草薙鎌でと腹へ打ち込み切腹する。所へ女房おかやも立ち戻り只ウロ／＼。弟和助も虫が知らすか又とつて返へし、此の有様をみて共に悲嘆にくれる。

その時、一人の虚無僧が入り來つた。笠を脱ぎ

捨てるとみると、それは盟主大星由良之助であつた。由良之助の目も濡れてゐた。

(佐和利) 彌作鎌腹の段

おかやは影を見送つて濟ぬ様子を汲んで出す茶碗片手にこちの人、そんならどうでも七太夫様へ養子の變改サイノ弟は段々入譯を語り斷り言ふし又あなたへ申せばいゝ今の通りじやと言ふてコレ所詮弟は得心せぬ様子、それが愚鈍から引出した此難儀、かゝア、ひよんな事になつたわいのと夫が悔みに女房も暫し途方に暮けるが、氣を取直しこれ彌作殿何のまア其様に案じる事はござんせぬ、和助様じやて兄の難儀になる事じやと聞しやんしたら、餘所に見ては居やしやるまい、戻らんしたら又よいやうに談合にもなるぞいな。こんな時には、酒でも呑で氣をしつかりともたしやんせ、煽してこふかへ、イヤ／＼おりやもう酒も水も咽喉を通らぬとさしうつむいたる顔形、見るめ涙につゝかゝる癢を押へてモ常々から突詰たお前の心、あんまり義理を立過してひよんな事など必ず見せて下さんすなへ、二親に死別れ杖柱共思ふて居るお前にもしもの事があつたらばわしや何とせふとふ成

ふと夫の膝に打ふして歎く心ぞいぢらしく。

彌作とかふのいらへなく、しほく立て以前の白臺金の包と俱に差出し、且那樣あなた様へ對してはモ一言の詞も出ませぬが、マア何かはさし置て此進物お返し申ますかはり、失禮ながら金五兩お断りの印と申し弟めはたつた今ナニスリヤもふ出立したか、ハイ止てもとまらぬ氣をせいで、ヤ、ヤ、ヤ、ヤ、ヤと表へかけ出、内に入我慢の眼血走つて彌作が鬢り引掴み、ヤイあれ程まで詞詰致したに某にもしらす弟を出立させ、僅かの目くさり金を突付け事を納んと計ることく横道者めこりや印南より某へ送りし百兩、いやさ身が武士が立ふかと踏つ擲いつ引摺廻し、エ、愛な恩知らずの土俵せりめが、ウ又先達て米進に詰り、水牢にてくたばる所を助けたる其大恩有某が武士道をよくく捨さしたな、此上は大勢追手をかけ引とらへて和助めを討放すと馳け出るを、絶り留め、サアくお腹立は御尤でござりますくが、どふぞ、お情には私をづたくにも切り刻み、弟はゆるしてやつて下さりませくくくく、ヤアだま

りおらふ、うぬが様な奴千萬人切たとて刀穢しだ、よいは我詞を背きし返報、最前聞たる四十餘人の者、上野を討んと企んで此上は京都の西八條、薬師寺殿の下屋敷へ早馬にて馳け付け、一部始終を注進して褒美の銀を、アイヤ此鬱憤を晴さんと、又かけ出すをこれ申と腰に取付身をふるはせ、まあ、待て下さりませくく、エ、放しおらぬかくく、それを注進しられましては弟ばかりじゃござりませぬ、四十餘人の衆が有望の坊どふぞく御了簡を、ヤア邪魔ひろぐなど蹴飛ばし、慾に眼も暗紛れ早足出しかけり行く。彌作今は絶體絶命、傍なる鐵砲追取て、手早に込たる玉薬火繩片手に表の方畔道を行く七太夫が脊骨へどふと打込ば、ふすほり返つて死てけり、ハア、もう叶はぬくく、所の役人殺したれば所詮生ては居られぬ體、申し七太夫様勘忍して下さりませくく、女夫がうけた恩も送らず、仇で返すも困果づく、ともに死るが言譯と、どつかと座して山刀、すらりと抜て手拭におし巻は巻ながら、追下賤の手もふるひ、身もわなく、エ、コレ立派に腹切らふと思ふても、ア、刃物の光で氣がおくれる、南無阿彌陀佛

くく、ヲ、そふじや百姓に似合た草苜鎌腹へ突當て一思ひと、探り取出す表へ足音、南然三寶と氣は轉倒當途も闇に打込む鎌、アツトばかりに目もくらみ、手足をもがき七轉八倒、のたうち廻る苦しみをしらぬおかやはいきせきと、ヲ、マア此暗いのに火も燈さず、何して居さんす彌作殿くくと探り寄つたる夫の傍、手先にさはる鎌の刃先血汐のしたより、ヤアくくこりやお前腹切てか、ハアはつと玉ぎるおかやが聲、提灯照し壹野和助門口ずつとヤア兄者人御生害か、こはくくいかにと馳けよつて、二人が介抱苦痛の彌作。

文樂座小史(昭和十六年調査)

○竹本座創立(現今ヨリ二百五十七年以前)
貞享元年二月(道頓堀西ノ芝居)

○文樂座發祥(現今ヨリ約百五十年以前)
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル

○第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地濱時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

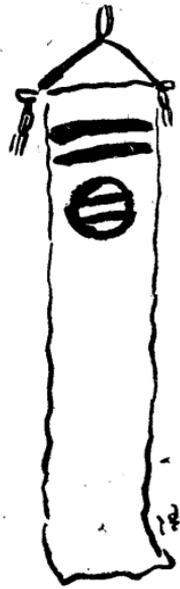
○松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ
其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立

昭和四年十二月以來現在ニ至ル



天守の段

妻大宇和妻
 場治田染人
 榎の三の兵衛秀の形
 戸郎方盛井役
 吉吉桐吉吉割
 田田竹田田鶴鶴
 光玉政玉文五
 助市龜藏郎

ツレ
 鶴鶴
 澤澤
 一清
 郎右衛門友
 野澤喜代之助
 竹本住太夫
 鶴豐鶴竹
 澤澤常子太夫
 宮太右衛門友
 奥口

日本賢女鑑

天守の段
 片岡忠義の段

本曲は寛政六年十月(二四五四)大阪北堀江座に上演された全十一冊よりなるもので、近松やなぎ、近松松助の合作。所謂大阪の陣を扱った「難波戦記」ものゝ一つで、豊臣氏の末路を材題とし、片桐且元の苦心を主想とした作で、内容上「鎌倉三代記」の前篇とも云ふべきもの。世界を鎌倉時代に附會して人名も片桐且元を片岡造酒頭春元、家康を鎌倉(關東)の北條時政、淀君を宇治の方、大野治長を大場三郎、後藤又兵衛を和田兵衛秀盛とし、大阪城を坂本城と呼んでゐる。尙、この天守の段及び片岡忠義の段はその第十冊目に當り、殊に切片岡忠義の段が、全篇のヤマとなつてゐる。因みに「日本賢女鑑」の題名は宇治の方本心告白の件りの「曇らぬ操日の本の賢女の鑑と云ひつべし」から出てゐる。

梗概

娘 住の江 吉田榮三郎

腰元 橋本 吉田多三郎

腰元 小幡 吉田兵次

奴 音右衛門 吉田玉米

奴 可助 吉田利男

片岡 忠義の段

切 豊竹古鞆太夫

鶴澤清六

人形役 割

片岡造酒頭春元 吉田榮三

和田兵衛秀盛 吉田玉藏

宇治の方 桐竹政龜

妻 染の井 吉田文五郎

妻 楨の戸 吉田光之助

娘 住の江 吉田榮三郎

軍 兵 大ぜい

坂本城内では宇治の方を中心に大場三郎を初めとして侍臣侍女達日夜酒宴にふけり、鎌倉方の政撃も知らぬものゝ様であつた。

その日、城中で片岡春元の妻染の井親子は和田秀盛の妻楨の戸が、不忠不義の春元を罵る言葉を胸に刃を當てられる思ひで耐へ忍ばねばならなかつた。それは春元が鎌倉の北條時政から大佛の鐘銘について難題を云ひかけられ、苦肉の策として宇治の方を關東へ人質として渡す様に約束したからである。

折柄宇治の方が大場三郎を伴つて出で來り、またしても酒宴が始まるのだつた。

女ながらも楨の戸は、宇治の方に諫言するが耳をかさうともしない。

どこからともなく陣太鼓の響が聞えて來る。酒宴の席は動搖した。戦ひが始まつてゐる。

和田秀盛が出仕した。宇治の方は酔興でもあらう、秀盛にまでしなだれかゝる。



和田
兵五

武巡皇竹右親太夫
相勤申伏

吉酒頭

漆
井

住の江

不興顔の秀盛。そして又しても宇治の方への諫言。座もしらけて宇治の方は大場や腰元共を引き連れて奥へ去つて行く。

後に秀盛の慨き。と、何處からともなく白羽の矢文、ふと高殿を見ると宇治の方が城外の合戦を見てゐる。

秀盛は、矢庭に宇治の方を抱きかゝへて高殿を下る。

大場三郎がその様子を嘲けつて見送つてゐた。

——突然大砲が炸裂して、高殿もろ共大場の姿も吹き飛んだ……。

片岡春元は坂本城の奥御殿に忍び入らんとして大花壇に現はれた。

それとみた大場の手下共、槍を以つて突いてかゝつたが忽ち春元の手にかゝつて倒れてしまふ。

丁度この時、彼方より妻染の井が娘と共に御殿を下つて來て春元に行き逢つた。

春元は「主君時政の御誕により、宇治の方を初め、和田、三浦の面々を皆殺しにせんものと大砲を打ち込んだるに仕損じたり、残念なり」と言ふ。

餘りの事に妻も娘も驚きあきれ、泣いて夫を、父を諫言する。

春元はせゝら笑ひ乍ら「一旦鎌倉へ返へり忠せし上は、も早やどうして心を變へられよう」と答へる。

聞くより娘住の江は用意の懐劍を抜き放ち、自害して泣き叫んで父を諫める。

春元は然し二人を蹴退けて、猶奥深く突き入らうとする。

この時、此方の一間に聲あつて、軍師和田秀盛が宇治の方を守護して現はれ出で、

「覺悟の切腹推察に餘りあり」

との大地を見ぬく言葉に春元は、今は張り詰めた心もゆるんで其の場にどうと座す。

諸肌ぬげば腹一文字にかき切つて、疵口卷いた白布も朱に染つてゐる。

驚いた妻子は取り纏つて泣く。

初めて春元は本心を吐露す。そして這ひ寄つて手負の娘を抱き起し、その健氣な最後を譽めたゝへる。

宇治の方も片岡父娘の苦衷を賞し、冥途の土産にとて自分の放埒情弱も、敵を欺く計略だとその本心を初めて明す。

春元は嬉し氣に、我が誠忠も斯くの通りと敵より奪ひ取つた源家の白旗を秀盛に渡す。

秀盛は喜び勇む。

春元は一旦なりとも返へり忠せし二股武士の成敗はこの通りと妻染の井の手を取り、自分の首をかき切つて果てる。

(床本) 片岡忠義の段

騒ぎ立つ、咲く花に向ふ敵なし鎧草、方八丁の大花壇鎌倉方へ裏切の、所存や深き奥御殿、忍び込んだる造酒

頭、道をさへぎる味方の從將。怪し曲者がさざと、突出す鎗は芽の穂先、手練鉾先上段下段双向ふ奴原こともせず、瞬く内に右左、突て落とせし稀代の手の内絶え入る死骸をぢろりと見やり、奸佞邪智にて貪りし、祿を食んだる大場が手下、直に報う天の責、思ひ知れよと一人言。見やる花壇の庭傳ひ、御殿を下る染の井親子遠目に夫と馳け寄つて、マアお前は我夫片岡様、父様おなつかしうござりますと、右と左に纏りつき、先き立つものは涙なり。造酒頭は不興顔。女房、娘、堅固にありしよな、主君時政の御説を受け、宇治の方を始め、和田三浦、塵殺にしてくれんずと、撃こんだる大砲の、空しくなつたる残念やと、我強き夫の一言に、顔つれんと打守り、エ、聞えませぬ我夫。頼家様の守護の臣と、定められたる身を以て鎌倉方へ返り忠とは餘りなでなし其様な浅ましいお心で有らうとは、今迄私は知らなんだはいな、不忠者の女房娘と、阪本中の物笑ひ、後ろ指を指さる其の口惜さ。連添ふ私は諦めもせうが、可愛さうに此娘が身すばらしう、うる／＼仕やるが、お前は不憫にござりませぬか、コレ可愛くはないかいな、妻子

不憫と思ふなら、傾く運の阪本に、どうぞ今一度お心を
 續へしてたべ、我夫と、諫めつ泣つ一筋に、籠る忠義の
 貞心は、涙の雨や一としきり、花も哀れを添へにける。
 ヤア聞きたくもないよまい言。伯夷叔齊餓で益なしとい
 へど、三度諫めて退くが臣下の道、夫に何んぞや、讒者
 に心惑はさる、短才愚盲の宇治の方、主君などとは穢し
 一旦鎌倉へ裏切の片岡、心變ずる謂れなし。黙りをらう
 と膠もなき、親の一徹住の江は、用意の懐劍抜き放し、
 咽喉にかばと突き立つれば、ハット驚く造酒頭、駈け寄
 る母は狂氣の如く、コレ、娘、其方は何で死ぬるのぢ
 や、何で何でと其の跡は、更らに言葉も出でざりける。
 住の江苦しき息をつき、何故死ぬとは聞えませぬ。阪本
 方にならびなき、忠臣無二の片岡と、人も敬ふ身を以つ
 て、鎌倉方へ返り忠、不忠者よ、恩知らずと、親の噂を
 聞く内にも、是まで忠義といはれた父上、深きお心あつ
 てのこと、今日は忠義が顯はるゝか、明日は手柄が知れ
 うかと、夫を頼みに人様の、笑ひ諷りを厭はずに、暮し
 た甲斐も情ない、現在お主の御座の間へ、恐ろしい石火矢
 を討手の役は何事ぞ、頼みも綱も切れ果て、死ぬる娘を

少しでも、可愛と思つてたまはらば、どうぞ心をひるが
 へし、お主に力を添へてたべ、頼み上げます父上と、あ
 やも涙に伏沈めば、聞く母親は正體無く、ヲ、娘出來し
 やつた。母も夫の裏切は、阪本方への計略と、思ふに違
 ふお心入れ、聞けば聞くほど情ない、何と存へ居られう
 ぞ、天にも地にもかけがへない、一人の娘が臨終の願ひ
 聞き届けたべ片岡殿。可愛いの我子と抱きつき、悔み歎
 くぞ道理なり。酒造頭は見向きもやらず、阪本の城中に
 我と思はん者は無きや、宇治の方御親子の御首給はらん
 と忍びこんだる片岡春元、イデ本丸へ切入つて、目覺しさ
 してくれんずと、女房娘をはねのけ蹴退け、花壇踏み立
 て、駈け出す。此方の一間に聲高く、ヤア、春元しば
 し、阪本の軍師和田兵衛秀盛、宇治の方を是に守護
 せり、見參せよと呼はつて、御籠をきつと捲き上げれば
 四方に薫る蘭奢の香、御前を守護する和田兵衛夫婦、
 威儀を正して着座せり。夫と見るより春元は、秀盛が傍
 近く詰め寄つて、ホ、珍らし、和田兵衛秀盛敵に取つて
 不足なし、サ、立上つて勝負せよ。早く、と急き立つ
 片岡。ハ、ハ、ハ、造酒頭は古今の勇士、此和田兵衛は一

方の砦を預る旗大将、今生の勝負ならば望んでも立合は
んが、死人を相手に益なき争ひ。ナニ此造酒頭を死人と
は。ヲ、宮商角微羽の五音はづれ、呼吸せまつて面色異
なり、切腹したに違ひない、鎌倉方への返り忠は、其名
を捨て阪本に、心を寄すを大忠臣。ホ、ヲ逞しゝ頼もし
ゝと、底意を見抜く秀盛が、詞に片岡氣もゆるみ、どう
と座して諸肌ぬげば、腹一文字にかき切つて、疵口巻い
たる白布も朱に染なす健氣の覺悟。見るに驚く母娘。扱
はさうしたお心の、御生害かとはかりにて、すがり嘆く
を突退けゝゝ、ソモ時政の難題を云ひほぐして、立歸ら
んと、思ふに違ふ鎌倉には、早や押し寄せんと軍の結構
不意を打たれて落城しては、阪本の瑕瑾此時と、胸を定
めて返り忠、又宇治の御方を鎌倉へ渡さんと請合ひしも
老年の北條時政、つらゝ人相を考ふるに、六十四歳の
定命なり。今時政六十一歳、宇治の方を下すに於ては、
普請の好みに數日を送り、三年の年月を隙取らば、時政
は早や寂滅。其内には阪本にも軍勢の催促せんと心を碎
きし返り忠。然るところ當城へ、大筒を撃込めよと、時
政の下知を受け、矢文の謎にて知らせし時刻、もし別條

はあらざるかと、案じに胸も安まらず、忍びこんだる甲
斐あつて、麗はしき御尊顔を拜し、是にましたる悦びな
しと、初めて明かす春元が、胸の底意の曇りなき。夫の
詞に染の井はいとゞ涙にかきくれて、コレゝゝ娘聞やつ
たか、エ、其の心を妻や子に、なせ明してたまはらぬ。
とうにも其と知るならば、可愛い娘を此様に、殺すまい
物情けない。一生殿御の肌知らず、賽の河原でうるゝ
と、かはいや迷ふでござりませう。今日一日に夫や子の
長い別れをすることは、いかなる宿世の報いぞと、聲を
限りに伏まるべば、楨の戸もさし寄つて、聞けば聞くほ
ど頼もしい、忠臣無二の片岡様、女の淺い心から、不忠
者よ、義理知らずと、云ひ過したが恥しい、赦してたま
はれ染の井様。イエイナ、現在連れ添ふ私さへ、忠義一
圖の我夫と、知らず恨んで身を捨てた娘が心、楨の戸様
不憫と思ふて下さりませと、返らぬ事をくどき立てゝ
口説き立つれば酒造頭、ヲ、娘出來した。命を捨て此の
親を、諫めん爲めの覺悟の自害、夫に引かへ裏切の、汚
名を取りしも我方便、深き計略あるとも知らず、親の不
忠を諫めんとは、異國本朝に例なき孝行者、手柄者、親
子は一世の別れとやら、息ある内に今生の、暇乞をと引

き寄せて、盡きぬ名残のはら／＼涙。手負は苦しき聲をあげ、其お詞が冥途の土産、名僧智識の引導と、いふと此世の名残にて、惜しや苔の初花も、無常の風に散りてゆく。わつとばかりに染の井が前後も分ず取り亂す、涙の限り片岡も、腸を断つ四苦八苦、五臓を絞る恩愛の、涙のしづく春雨に、淀の川瀬に波立て堤を穿つ如くなり宇治の方も涙をとどめ、片岡親子が冥途の土産、不義放埒の自らが、心の底を見すべしと、懷中より一つの位牌取出し。見よや方々、右に記せし法名に亡君右大將頼朝公、左が妾が逆修の戒名、朝夕肌身放さぬは、阪本の落城近きありと心の覺悟極めし印、いかなれば口惜や、四海一統時政が皆仁政に抑へられ、味方の武士も心々、底意の程を探らん爲、放埒懦弱も敵方に、油断をさせん爲ばかりと、未然を察する御詞。實に亡君の遺命を立通したる一城に、敵の大軍引受けて、骸も名をも埋めども曇らぬ操日の本の、賢女の鑑といひつべし。片岡悲嘆の涙を拂らひ、ハア天晴の御覺悟、不忠者の片岡が、一つの功は先達し、鎌倉へ奪ひ取られし源家の白旗、術をもつて恙なく奪ひ取つたり、いざ秀盛殿御受納あれと、渡

せば取つて押し戴き、ハア有難し忝し、此一品こそ百萬騎の軍卒を得たるより、遙にまさりし味方の利運、たとへ時政諸軍の從へ、千變萬化に備へを立て、逢ふ坂本に寄するとも、何程の事あらん。佐々木に諸葛が智謀あり三浦に頂羽の勇みあり、我も子房が軍慮を守り、たゞ一戦にかけ惱し、親爺に泡を吹かせんは、此秀盛が手裏にあり。ホ、ホ、ホ、さもあらん、勇しい。併し稀代の北條時政仁情表裏の術を以て従ひなげし鎌倉方は、朝日に登ぼる勢ひぞや。ヲ、拙き運の頼家親子、此一城の土となり、冥途の夫にお目見えせん。ヤア不甲斐なき御仰せ。普く日本六十餘州、唐天竺が一つになるとも、我見る目には小兒の戯れ、ヤコレ氣遣ひあるなと勇み立つ。ホ、心地よし／＼。二股武士の片岡が、成敗は先づ此の通り、いづれもさらばと女房を、膝に引き敷き我と我、首に刀を押し當て、かき切る丈夫えい／＼聲。皆々一度に手を合はせ、唱ふる六字は鯨波、此の世の出陣西方の彌陀の御國の大元帥、惜しや果敢なき次第なり。



新曲 紅葉狩

平維茂 竹本春 太夫

更科 實惡鬼 竹本南部 太夫

山神 豊竹 つばめ 太夫

腰元 竹本 常子 太夫

腰元 竹本 叶美 太夫

豊澤 新左衛門

鶴澤 寛治郎

鶴澤 友平

・謡曲「紅葉狩」を骨子として、新しく作詞、作曲されて初めて文楽座の舞臺に上されたのは、昭和十四年十一月興行の際で、作詞者は紫紅山人、作曲は鶴澤重造である。

筋は、余五將軍平維茂が信州戸隠山に紅葉狩の折、美しい貴女の一群に出合ひ、勧められるまゝに酒を過して睡ると、夢に山神が現はれて、鬼女にたぶらかされて居るのだと告げるので、眼を覺まして鬼女と戦ひ、所持する名劍の威徳でそれを退治すると云ふ一段である。

(床本) 新曲 紅葉狩

信濃路に名高き山や戸隠しの、時雨に色も染め上げし錦いろどる夕紅葉、影も長月治まれる御代は平の維茂が供をも連れず唯一人、矢竹心の梓弓入野の草の露分けて行方も遠き山蔭の嶮しき道を辿り來て、ア草木心なしと雖も春は花咲き秋は梢を染める山紅葉、色とりどりの唐錦、紅の一葉は烏帽子の上黄金の色は袖袂すれつからみ

| 山 | | 腰元 | | 平 | | 更科 | | 人形役割 | 琴 | | 鶴 | | 竹 | | 野 | |
|---|---|----|---|---|---|----|---|------|-----|---|----|---|-----|---|----|---|
| 神 | | 野 | | 野 | | 鬼 | | | 野澤吉 | | 澤勝 | | 澤仙團 | | 澤八 | |
| 桐 | 竹 | 吉 | 野 | 吉 | 野 | 桐 | 野 | 桐 | 野 | 豐 | 澤 | 豐 | 澤 | 野 | 澤 | 造 |
| 紋 | 十 | 田 | 野 | 田 | 野 | 竹 | 澤 | 竹 | 澤 | 鶴 | 澤 | 竹 | 澤 | 澤 | 八 | 造 |
| 郎 | 郎 | 兵 | 野 | 玉 | 野 | 紋 | 吉 | 紋 | 勝 | 仙 | 仙 | 團 | 團 | 八 | | |
| | | 二 | | 幸 | | 十 | | 十 | 芳 | 叶 | 作 | | | | | |
| | | 郎 | | | | 郎 | | | 藏 | | | | | | | |

つ散りかゝる落葉の色に飽きもせで、歸る家路を忘れじと暫しイみ居たりけり、テ心得ぬかゝる深山路殊に日も早や傾きしに、何所の誰が手づさみか、いと床しき琴の音の主は如何なる人ならむ、審しさよと見廻す彼方、紅葉の木の間に幔幕の張りしは高位の方なるべし、興妨げんも不羨けと道を隔てて過ぎ給ふ、ナウノ、賓人暫くと聲打ちかけに更科姫、暮より出づる、白菊の香り氣高きなりかたち、こなたは思はず振り返り、待てとお止めなされしはやんごとなき御方なるか問はれて姫は手をつかへ、思ひも寄りぬ深山路に女計りの紅葉狩無醉狂とも思し召そふが此の戸隠しのみぢ葉の錦と紛ふ此景色、獨り樂しむ本意なき、あなた様にも御一緒に御覽じなされ下さつたら有難う存じますと言葉やさしき女郎花、露に色香やこぼるらん、ア、イヤ折角の仰せなれど男女七歳にして座を共にせずとの世のたとへ、御縁もあらば又重ねてと行かんとするを引き止め、アモウシ、時雨に急ぎ給ふより一樹の影に立寄りて俱に樂しむ菊の酒、濡れて色ますもみぢ葉の浅き契りを末迄も遂げたさ故の我思ひ見捨て給はで諸共に深き山路に鹿ぞ啼く妻戀ふ聲の身に



染みて一層思ひは増鏡、曇らぬ内を今暫し休らひ給へと
夕映への、紅葉恥らふ其風情、岩木ならねば維茂も心動
きてたゆたいつ、日も黄昏に近づきて歸館に心急げども
見渡す山の夕紅葉又一入の風景に暫し名残りを惜まんと
仰せにいざや腰元が案内に姫も引添ふて連れ立つ足はい
そいそと散り布く落葉菊の花秋海棠の色深き道踏み分け
て維茂が猛き心の置く霜と共にまどひの苔庭胸も燃へ立
つ毛氈に運ぶ盃銚子酒、心嬉しき玉箒人の情の盃も數重
なりてうつとりといつか隔ても中垣に並々ならぬ此名酒
思はず銘酎致せしと又もさゝる盃を手に取り上げて打ほ
ゝゑみ此大盃を呑みもせて波と受けたる維茂にさかな所
望と仰せある腰元共は口々に、オ、それ〱其おさかな
にはお姫様日頃のお稽古おさらへに一さしお舞ひ遊ばせ
と勧むる詞姫君は、拙きわざも殿御への心のたけを萬分
一おはもじながらと立上り、敷島の三つの景色と歌人が
霞と共に杖を引く一ト目千もとの三吉野や花の盛りによ
そへてし越路の雪の降りつみて見渡す限り白妙の木曾山
越へて更科の木々の梢も紅葉して山を望めば山姫の手織
なせる唐錦柞の森や木の蔭の小倉の山の風景は外に類ひ

も嵐山流れの元はいづく共誰白菊の咲き亂れ汲みて香を知るくすり水さす手引く手もいつしかに夢ばし覺まし給ふなと云ひ捨て奥へ入相の夢かうつゝか維茂が酒の氣げんにうとゝと結ぶも早き秋の暮、夜嵐寒き山蔭に現はれ給ふ神童の白衣のみ姿おごそかに、如何に維茂汝無明の酒に酔ひ臥し此所にある事危ふしゝゝ一時も早く疾く

が武勇勝れし太刀捌き惡鬼は炎を放ちつゝ秘術を盡す有様に紅葉は火の子と飛びちがふ、咸陽宮の烟りの中刃鋭く無二無三切りかけ切り伏せ維茂が、忽ち鬼神を滅ぼせし劍の威徳ぞ。

起きよ我は八幡大神の命に依り假に姿を現わして弓矢の道を護るなり、疾くゝ目覺め立ち去れと持たる杖をつき鳴らしゝゝ吹く風と諸共に掻き消す如く失せ給ふ夜風身に染む維茂がムツクと起きて四邊を見廻しアラ淺ましやゝ我無明の酒に魂を奪われまどろむ中に神夢の告げ扱は今まで姫なりと思ひ詰めしは正しく鬼神、イデ本體を見届けて世の災ひを絶ち呉れんと突立ち上る折しもあれいと物凄き山嵐風にヒラゝもみち葉の影にスツクと異形の姿さてこそ惡鬼でありしよな、ア、サ女と化して汝等の命を奪ひ先つ頃大内山に相果てし我眷屬の鬱憤を晴らさんものと思ひしにエ、口惜しや、汝が所持する名劍の威徳に通力破れたり、イデ此上は汝をば我隠れ家へ連れ行かんと襲ひかゝるを事ともせず、きらめく雷維茂



澤市内の段

竹本伊達太夫

野澤勝平

壺坂寺の段

竹本相生太夫

野澤吉五郎

鶴澤鶴太郎

野澤勝之介

人形役割

桐竹政龜

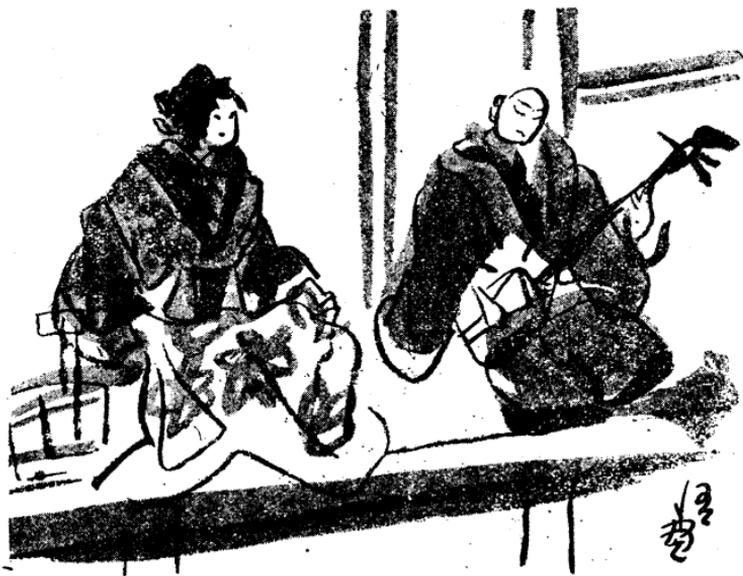
吉田文五郎

観女座
世房頭
音お里市
桐吉桐
竹田竹
門文政
次五五
郎郎龜

壺坂観音靈驗記

澤市内の段
壺坂寺の段

この「壺坂」は「良辨杉」等と同じく名人豊澤團平とその妻加古千賀との夫婦の協力によつて生れた明治時代の新作淨瑠璃中、最も人口に膾炙した曲である。元來この「壺坂」は「西國卅三所観音靈場記」と呼ぶ各寺一段の形式をもつ作者不詳の合作物の中の一役に當るもので恐らく西國第六番の札所大和壺坂寺に流布してゐる縁起に加筆した程度のもものが臺本となつてゐたらしく、それを、更に千賀女が補筆改作して成つたものが現在の「壺坂」で、作品として構成は至極單純。これに夫の團平が節付けして始めて「壺坂」、正しくは「卅三所花の山壺坂靈驗記」が生れた。但し團平の節付けも、今日の「壺坂」に大成するまでには前後二段の改訂を経てゐた。最初千賀女の加筆した「壺坂」に節付けしたものを床にかけたのは島太夫で、明治十二年十月大阪大江橋の席であつた。それを受けて二度目に名人佳太夫（越太夫時代）



が語つたが、一時中絶した。後三代目大隅太夫が更にそれを傳承して、明治廿年二月十日から稻荷の彦六座で團平自らの糸で語ることになつたが、この時團平は前の節付けを全然改めて今の様なグツと派手で流麗巧緻なものにしてしまつた。斯うして俄然人氣に投じ、流行を極はめ、一般化されて今日に至つた。

梗概

大和國壺坂寺の片邊りに澤市と云ふ座頭が住んで居た。女房のお里は座頭の妻には惜しい程美しいと云つて近所でも評判だつた。それが盲目の澤市には祕かにねたましかつた。それにお里と夫婦になつて丸三年、毎夜七ツの鐘が鳴るとそつと家を抜け出して行くお里が不審でならなかつた。誰かお里が思ひを通はす男があるに相違ないと澤市は思つてゐた。然し盲目の自分の身を考へるときは僻みさへ加はつて、いつそ黙つて居やうとも考へた。

とある夕方である。澤市はいら／＼する胸をし

づめて、遣る瀬ない三味線を弾いてゐた。

「鳥のこゑ、鐘の音さへ身にしてみても思ひ出す程なみだが先へ落ちて流るゝ妹脊の川を……」

澤市は自分でこの唄がかなしかつた。

めづらしく三味線などを弾いてゐる夫の姿がお里には機嫌よく見えなくもなかつた。お里がそんなことを云ひ出すのが澤市は心外だつた。いつそのことお里に云つてしまはう。澤市はさう決心した。そして今迄不審に思つて居た事などを怒りの聲さへ交へて語つたのだつた。

それを聞いたお里は、その譯を今まで話さなかつたとは云ひ乍ら、夫の言ひ分が自分の心に引き較べてあんまりなのに泣きくづれた。

譯はかうだつた。澤市とお里は従兄妹同志一緒に育てられた仲だつた。その中に澤市は疱瘡にかゝつて眼までつぶれてしまつた。然しお里は貧苦の中にも夫を思ふ一心に働いた。そして澤市の眼病平癒のため、この三年の間と云ふもの、雨の夜

も雪の夜も、壺坂の観音へ跣足詣りをつゞけて居たのだつた。

それと解つてみると澤市は貞節な妻の前に自分がならべた邪推がはづかしかつた。そしてお里に泣いて詫びるのだつた。

すべてを打開けたお里は、澤市の心を引立て、一緒に観音へ参詣してみたら、とも云つた。腑甲斐ない自分をさうまで云つて呉れる女房に對しても、眼が開くものなら開きたいと澤市は思はないでは居られなかつた。

何時の間にか夜になつた。お里に手を取られた澤市は険しい坂道をやつとのことで壺坂の観音堂まで辿りついた。二人はつゝまじやかに西國六番の札所此處壺坂観音の御寺に頼づいて御詠歌を上げた。

この眼が癒るものか、癒らぬものか三日の間此處に籠つて祈らうと、澤市はお里をその仕度に家へ歸してしまつた。然し澤市はもう決心して居た

のだ。あの貞節な妻にこの上面倒を見て貰つても所詮は治ることのない業病、いつそひと思ひに谷へ身を投げてしまはうと思つたのである。

杖を力に澤市は裏山へ上つた。遠く聞える谷間の水音をしるべに、唯未來を祈つて身を躍らせて谷底深く身を投げた澤市だつた。

一人残して來た夫の身が案じられ、お里は御寺へ立歸へつてみると夫の姿は見えない。呼べど叫べど松風と谷の音ばかり。お里は狂氣の様に澤市の行方を尋ねた。ふと見ると崖の上につき立てた見覚えのある夫の杖、はるか谷底を見やれば、さす月光にあり／＼と澤市の姿さへ見えるのだ。夫澤市を失つてお里はどうして生きて居る甲斐があらう。お里も澤市の跡を追つて谷間へ身を投げたのであつた。

やがて夜が明けかゝる頃、谷間に横はつた澤市お里の死骸には夜明けの風がつめたくあたつた。何處からともなくかほる靈香、妙なる音楽につれ

あり／＼と姿を現じ給ふたのは壺坂の觀世音だつた。

觀世音は澤市、澤市、お里、お里と二人を呼びさますのだ。二人は眠りから覺めた様に眼を開いた。お里の貞心に佛も感じ、二人の命を救つたのである。さう云へば澤市の眼も開いて居た。觀世音は、三十三所の靈場を巡禮して佛恩に報ひよと云ひ残して姿を消してしまつた。

二人の喜びは何にたとへ様も無かつた。たゞ相抱いて躍り狂ふ二人だつた。

(佐和利) 壺坂觀音靈驗記

夢が浮世かうき世がゆめか、夢てふ里に住みながら、住めば住むなる世の中に、よしあしびきの大和路や、壺坂の片邊り土佐町に、澤市といふ座頭あり。生れ付いたる正直の、琴の稽古や三味線の、糸より細き身代の、薄き煙の營みに、妻のお里は健かに、夫の手助け賃仕事、つづれさせてふ洗濯や、糊かいものを打盤の、音も幽のくらしなり。

モとゞ様や、かゞ様に別れてから伯父様のお世話になり、お前と一所に育てられ、三つちがひの兄さんといふて暮してゐる内に、情なやこな様は、生れも付かぬ痘瘡で、目かひの見えぬその上に、貧苦にせまれど何のその一旦殿御の澤市様、たとへ火の中水の底、未來迄も夫婦ぢやと、思ふばかりかコレ申し、お前のお目を治さんと此壺坂の觀音様へ、明の七つに鐘を聞き、そつと拔出で只一人、山路いとはず三年越、せつなる願ひに御利生のないとはいかなる報ひぞや、觀音様も聞へぬと、今も今迎恨んで居た。わしが心も知らずして、外に男がある様に、今のお前の一言が、私は腹が立つわいのと、くどき立てたる貞節の、涙の色ぞ誠なり。

ほんに思へば此身程、はかない物が有るかいな、二世と契りし我夫に長い別れとなる事は、神ならぬ身の淺ましや、かゝる憂目は前の世の、報ひか罪かエ、情けなや此世も見えぬ盲目の闇より闇の死出の旅、誰が手引を仕てくれふ、迷はしやるの見る様でいとしいわいのとかき

くどき、くどき立てくどき涙は、壺坂の谷間の水や増るらん。

ハ、ハ、ア有難や忝なや、是より直にお禮参りは浮木の龜、始めて拜む日の光は、年立ちかへる心地ぞや、是ぞ誠に觀音の、御利生有りけるや、見えぬ眼も見え明らかに、有難かりける新玉の、年立ち歸る如くにて、水も洩らさぬ夫婦の命も助かりけるは、誠に目出度うさふらひける。けふは嬉しや杖を納めて折しも朝の、日の目を拜んで、お禮申すや神や佛萬見せ給ふは是偏へに觀世音これ偏に觀世音の、誓も重きは岩を建て、水をたゝへて壺坂の、庭のいさごも浄土なるらん御示、有難かりける御法なり。

文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來
舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のはうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはすうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゝつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は

永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を

得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と人形の動作とがピッタリと合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡単に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された一個の人形を三人がよりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大内鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日

から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたから

の名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。

それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひぱりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)

觀賞おぼえ

昭和十六年十一月 日

条仙人吉野花王

傾城阿波の鳴戸

義士銘々傳

日本賢女鑑

新曲紅葉狩

壺坂觀音靈驗記

内案御居芝の月一十

| | | | | |
|---|---|--|---|--|
| 川湊戸神 場劇竹松 四〇四四川湊話電 | 條四都京 座南 五五一一圓紙話電 | 堀頓道 座角 二一二二南話電 | 堀頓道 座中 九七二一南話電 | 阪大 座伎舞歌 六二八二戎話電 |
| 日初日五 時四後午日每 演開 | 日初日五 開二午正晝 演回半時五夜 | 日初日一 開二午正晝 演部半時四夜 | 日初日一 開二午正晝 演回時五夜 | 日初日一 時四後午日每 演開 |
| 曾我廼家五郎劇 | 松竹家庭劇 | 中村翫雀襲名興行 關西大歌舞伎 | 厚生劇 | 井上正夫 水谷八重子 大合同 |
| 第一 第二 第三 第四 梅 青 葉 敵 の 實 空 櫻 談 | 第一 第二 第三 第四 第五 千客 玩具 鯨の 村を の 機 人 醫 母 親 生 銃 來 | （晝の部） 信州川中嶋 野崎村嶋 菅原傳授手習鑑 山彦靜八丁 （夜の部） 伊賀越道中 藝道一代 三ツ子 形守男六姥 | 第一 第二 第三 第四 第五 遺 追 北 息 御 分 國 日 供 し 養 妻 和 子 役 | 第一 第二 第三 わ が 愛 の 記 赤 道 魚 |
| 一 二 三 四 等 等 等 等 席 席 席 席 二 一 一 一 圓 圓 圓 圓 （税別） | 一 二 三 四 等 等 等 等 席 席 席 席 二 一 一 一 圓 圓 圓 圓 （税別） | 特 一 二 三 四 五 等 等 等 等 等 席 席 席 席 席 三 二 一 一 一 圓 圓 圓 圓 圓 （税別） | 特 一 二 三 四 等 等 等 等 席 席 席 席 二 一 一 一 圓 圓 圓 圓 （税別） | 一 二 三 菊 櫻 等 等 等 席 席 席 席 四 一 一 一 八 六 圓 圓 圓 圓 圓 （税別） |

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でゐる。

文樂座人形淨瑠璃は 當に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませう、皆様の御期待に背かね様、皆様に御満足して頂けるやうと一回不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出入口は 下足札赤札は正面西木家人口でお渡し致します。黒札は正面

入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として 案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上りする事に致しました。御一報次第登壇上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十六年 十月廿一日印刷
昭和十六年十一月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八番地
總發行所 松竹株式會社大阪支店
發行所 鳥江 鏡也

大阪市西區土佐堀通一丁目十二
印刷所 永井日英堂印刷所

一部 金二十錢

